

## 冬季オリンピックの歴史を〈綴る〉

和田 浩一

**20** 21年の夏、東京で第32回オリンピック競技大会(Games of the Olympiad)が開かれた。ところで、オリンピック冬季競技大会(Winter Olympic Games)には、4年間を意味するオリンピックの文字がない。なぜだろうか。

### 冬の生活手段から近代的なスポーツへ

冬季大会は1924年にフランスのシャモニーで、オリンピック大会から30年ほど遅れて始まった。興味深いことに、近代オリンピックの誕生が決まった1894年の国際会議の議事録には、スケートがオリンピックを代表すべきスポーツの1つとしてあがっている。

スケートやスキーはもともと、寒さのきびしい地域の氷上・雪上の交通・輸送手段として発達した。これらの生活手段は道具の改良や運動技術の進化により、すること自体を楽しむ娯楽へと変貌をとげる。1892年に国際スケート連盟が設立され、同年1月にはノルウェーでノルディック複合の大会が開かれるなど、19世紀末には近代スポーツとしてのかたちを整えた。20世紀を待たずして屋内人工スケートリンクを建設したヨーロッパ人の娯楽にける情熱には、驚きを隠せない。

1908年のロンドン大会ではフィギュアスケートが、20年のアントワープ大会ではフィギュアスケートとアイスホッケーが、いずれも屋内リンクで実施されている。冬の生活手段から組織的に楽しむ身体活動へと近代化を果たした冬のスポーツの存在と、大会で採用される競技種目の決定権がIOC(国際オリンピック委員会)ではなく大会組織委員会にあったという当時の事情が、これらのエピソードを生み出した。

### オリンピック大会とは「別の」イベント

1921年のIOC総会で、冬季スポーツの扱いが議題にのぼった。24年に「冬季スポーツ週間」というイベントを開き、これを同年開催のパリ大会に関連づけたいとフランスの委員が提案したのである。これに対し2つの反論が出された。①オリンピック大会は1つの都市で実施されなければならないという原則論と、②冬季スポーツをオリンピック大会の構成要素にすべきではないという、スキー競技の主導権をIOCに渡すまいとした北欧諸国からの異議申立てである。最終的には、この冬季スポーツのイベントをIOCが後援するというかたちに落ちついた。大会前年の総会では、オリンピック大会とは「別の」賞状を授与することまで確認されている。

パリ大会の翌年に開かれたIOC総会では、①冬季大会を創設すること、②冬季大会には「オリンピック」という用語を使わないこと、③冬季大会は開催順に番号をつけることが定められた。

現在までに中止となったオリンピック大会は計3回あるが、いずれも「第〇回」という番号が刻まれている。これは、オリンピックのリズムは古代オリンピックの「休戦の観念」と密接に結びついているので「厳密に守られなければならない」という、近代オリンピックの創始者クーベルタンの考えにもとづいている。これに対し、中止になった冬季大会に番号は振られていない。オリンピック大会と差別化された冬季大会の性格が、ここに反映されている。

IOCは1926年の総会で、「冬季スポーツ週間」を第1回冬季大会として追認し、28年の第2回大会の開催地をスイスのサン・モリッツに定めた。ここに冬季大会の正式なナンバリングが始まった。ちなみ

に、第1回(60年)から第7回までのパラリンピック大会も、オリンピック開催年に実施されていた障害者スポーツの国際大会がのちに、パラリンピック大会として追認されたものである。

### 環境問題へのはじめての対応

アジア初の冬季オリンピックになった1972年の札幌大会は、IOCが環境問題への対応をよぎなくされたはじめての大会でもある。68年大会の招致をめざしていた札幌が国際スキー連盟の助言に従い、アルペンスキー滑降の競技場を恵庭岳えにわたけに建設することを決めた62年が、その起点となった。

当時の日本では、1967年に公害対策基本法が施行され、71年には環境庁が設置されるなど、公害問題(被害者)から環境問題(当事者)へと意識の転換ははかられていた。国際的にも環境問題を地球規模で考える機運が高まっており、国際連合環境計画が72年に設置されている。

このような時代を背景に、北海道自然保護協会理事長の井手は1966年9月2日、IOC会長のブランデーに個人の資格で書簡を送った。恵庭岳の滑降競技場建設に反対する国際自然保護連合代表者らによる文書を添え、滑降の会場を変更して冬季大会と自然保護との調和をはかるように日本オリンピック委員会への働きかけを求めたのである。

ブランデーは札幌大会組織委員会に善処を求めたが、これは環境問題への積極的な関与ではなく、自然保護団体による抗議活動の大会への影響を最小限に食い止めたいとする消極的な考えにもとづく対応だった。IOCは1991年にようやく、環境問題への責任を自らの使命としてオリンピック憲章に書き込んだが、これも内発的な動機からではなく、環境と開発に関するリオ宣言(92年)にあわせた外発的な対応だったといえよう。

なお、井手の書簡がきっかけとなり、大会終了後に施設と設備を撤去してその跡地に植林することを条件に、恵庭岳の森林を伐採して滑降競技場が建設されることになった。札幌大会組織委員会とその解散後に事後措置を引き継いだ北海道庁は約束どおり、施設と設備を撤去したコース跡地に植林したが、50年ほど経った今も残念ながら、隣接する天然林と調和するには至っていない。

### ブランド力向上と経済的自立

冬季大会は1994年のリレハンメル大会から、オリンピック大会の中間年に開催されている。この開催周期の変更は、86年に開かれたIOC総会での決議によるものだった。

総会では、オリンピックの周期は冬季大会に適用されていないことが確認されたうえで、①2年に1度の開催でオリンピックのプレゼンスが向上し、自由な発展と観客増が見込める、②事業(会計)年度の分散により、同じ年度に2つの大会に参加する各国オリンピック委員会の事務的・財政的負担が軽減される、などの賛成意見が出された。橋本聖子・東京大会組織委員会会長(スケート・自転車)のような、冬・夏両大会への出場をめざす二刀流アスリートを後押しすることにもなるアイデアだった。

ただしIOCの本音としては、両大会間に適当な期間を挟むことができれば、それぞれの大会への注目度がさらに増してオリンピックのブランド力が高まり、メディア放映権料やスポンサー契約料の大幅増が見込めると踏んでいたに違いない。

当時のIOC会長は、1988年のソウル大会からプロ選手の参加を認め、オリンピックの商業化を進めたスペインのサマランチである。西側諸国がボイコットしたモスクワ大会(80年)の終了直後に会長に就任したサマランチは、4年後のロサンゼルス大会で東側諸国による政治的報復を見届けなければならなかった。さらには、第2次オイルショックをきっかけとした世界同時不況と各国政府による緊縮財政とにより、スポーツ団体へ注がれる各種の資金が減額され、IOCには経済的な逆風も吹いていた。外交官だったサマランチは冷戦の影響を防ぐための外交努力を続けつつ、オリンピックとスポーツの経済的な自立を確立する術を探していた。冬季大会の開催周期の変更は、このようなIOCの経済的な自立という歴史的文脈のなかで理解できよう。

最後に、クーベルタンが晩年に語った言葉を紹介したい。「オリंपイズムは歴史の一員です。オリンピック大会を開催するということは、歴史を綴ることにほかなりません。……世界史こそが、真の平和が抛り立つただ1つの本物の礎なのです」。

(わだ・こういち/フェリス女学院大学国際交流学部教授)